

---

# 夏の最中のベランダで

白星奏夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の最中のベランダで

### 【ノード】

Z0037Z

### 【作者名】

白星奏夜

### 【あらすじ】

<http://www.totalcriters.jp/kiyaku.html>でも、掲載させて頂いたものです。あらすじ  
が必要ないくらいの短編です。夏の真っ最中にベランダで戯れる少  
女達…、はてさてどうなることやら。いつだつたら楽しいなあ、と  
いう作者の妄想で御座います。

夏。じりじりと太陽が辺りを焦がしていく。まだ、昼前なのに今日もすごい熱気だった。6階建ての集合住宅、そのベランダも例外なく熱波に焼かれている。地上よりは、少しマシな程度の気温差である。特に今日は、風も吹いていない。

「あ～っ、あつついわ、何この殺人的な熱氣」

鮮やかな黄色い髪の少女が、太陽を見上げながら呻いた。年は、高校生くらいだろうか。

「姉様は文句ばっかりですう、ご主人様に対する感謝といつものが全く感じられないのですう」

真っ赤な髪をした少女が、不服そうに頬を膨らませる。こちちは、背が低く小学生くらいにしか見えない。

「それを言うなら、あいつはどうなんだよ」

黄色い髪の少女は顎で、真紅の髪の少女の隣を指した。そこには、誰もがはっと目を引く美少女が座っていた。肩に零れる青い髪が印象的だ。年は、黄色い髪の少女と同じくらいだろう。青い髪の少女は、うつらうつらと眠るように頭を揺らしている。

「お嬢様は超朝型なのですう、決して不真面目にしているわけではないのですう」

「つたぐ、良いよな。綺麗で、優げなお嬢様ってのは」

黄色い髪の少女は、青い髪の少女を羨ましそうに眺めた。

「姉様、妬いてます？」

真紅の髪の少女は、小悪魔な笑顔を浮かべる。黄色い髪の少女は、頬を真っ赤に染めて狼狽した。

「なつ、なにを言つてゐんだ、お前はーーあつ、あたしは、妬いてなんか」

「お嬢様の方が、ご主人様に愛でられるからつてまあ。でも、そん

な一途でまっすぐな姉様も素敵ですう。はあ、恋する乙女は無敵ですう」

「「」の、まだ言つかつ、ちよつと黙れ」」の……」

「わやああつ、姉様に犯されるう」

「誤解を招くような言い方をするなあ……」

狭いベランダで、二人の少女が暴れ回る。青い髪の少女は、ああまたいつも光景かと眠たい目を擦りながら、くすりと笑んだ。

その時、からからとベランダの扉が開いた。

黒髪の少年が、不思議そうな顔をしてベランダに顔を突き出す。きよきよろと辺りを見回して、首を捻つた。

「どうしたの、悟？」

母親の声が後ろから尋ねる。

「いや、話し声がしたよつた気がして」

「誰もいるはずないでしょ、6階のベランダに。いやね~高校生にもなつて」

「つるさいな」

少年は首を捻りながら、もう一度ベランダに視線を落とす。おかしなところはない。いつも通りだ。

鮮やかな黄色いひまわりと、愛らしい真つ赤なリードマントと、美しく青い朝顔が、楽しそうに少年を見上げていた。

(後書き)

「」感想を頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0037z/>

---

夏の最中のベランダで

2011年11月30日13時54分発行